

【佳作】

着ることのなかつたセーター

山田幸夫・大阪府阪南市

三十年前、父が亡くなつてから母は気落ちしたのだろう、持病が悪化し、入院して間もなく父の後を追うように逝つてしまつた。

母が亡くなる数日前のことだつた。

私は、母の部屋で編み機と斑模様のセーターを見つけた。丁寧に包装された箱の中に防虫用のナフタリンの欠片とともに、そのセーターはあつた。

——大正生まれの母は、外へ働きに行くことなく、自宅で機械編みの内職をしていた。私が学校から帰つてくると、「ジャーツ、ジャーツ」機械編みのリズミカルな音がした。その音に合わせるように「お帰りっ！」と言う母の声が重なつた。そのまま音は止むことなく、毎日、夕食時分まで続いた。私は編み物をしている母が好きではなかつた。

しかし、小学五年生のときだつた。

父がお酒に酔つて遅くに帰つてきた翌日曜日の朝。母は、脈絡もなく突然、私に父のことを話した。昨夜、お酒のために給料をほとんど使つてしまつたのだと。その母の言い方は怒つてゐるふうではなく、父をかばう口調だつた。このとき、父の飲酒は、戦争にも原因があるのだと聞かされた。多くの戦友を亡くした過酷な戦場での後遺症を癒すお酒だと。そして、機械編みは、家計の足しにするために始めたが、若いころ実家のある泉州の紡績工場で働いたことがあり、それと縁のある仕事をしたかつたと言つた。

私は、この日を境に、母に協力する気になつていつたようと思う。

私が中学生のときだつた。母は、機械編みの資格検定を受けると言い出した。「合格すると、仕事をもつと回してもらえて、収入が増えるんよ」

しかし、実技は何とかなるが、筆記は難しいらしい。

「弟妹の子守で尋常小学校もまともに行つてへんよつて、難しい漢字は読まれへん」  
そう言いながら、鉛筆の芯を舐めていた姿が思い出される。

試験当日の日曜日、私が重い編み機を持ってついて行き、終わるまでの長い時間、控室で待つた。合格者の名が呼ばれた時の弾けるような母の笑顔も鮮明に憶えている。女子中学生のようにはしやいだ。

その後、母は益々忙しくなつていつた。夜の遅い日もあり、声をかけたことがある。

「お母ちゃん、早よ、寝えや」

その言葉を無視するかのように多忙を極め、当時流行つた英文字やキャラクターを編み入れる依頼も増えていった。

「AとかBとか、英語なんかよう解らへん」

私に英文字のデザインを頼んだ。だから、近所で母の編んだものを着ている人はすぐ分かり、見かけると自慢したい気分になった。

しかし、自分でも予想外のことが起きる。私の高校受験が迫った三年生の年末のことだつた。母は、一着のセーターを私に見せた。

「お正月が来るし、セーターを編んだんやけど、ユキオ、これ着てみい」

編み物の仕事は、秋口からお正月前が一番忙しいはずだ。そんな母が、私のために編んでくれた初めてのセーターだった。しかし、それは見るからに、余りの毛糸を寄せ集め、継ぎ足して編んだと思われる斑模様になっていた。妙に派手な柄だ。受験勉強で神経が過敏になつていたのだろうか、私は、それを手に取ることもなく言つた。今も憶えている。

「そんな変なセーターなんか要らん！」

母は曇つた表情のまま、何も言わずセーターを握り締めていた。後悔の念はすぐに襲つたが、後の祭りだつた。素直になれなかつた。

そのセーターが、二十五年を経て、私の目の前に現れたのである。横に居た妻が言う。「誰のセーターなん？ いろんな毛糸が折り重なつて素敵な柄やん。新品のようやし、わたくしが着てもええかな」

すでに私には小さくなつていたセーターを、妻は胸にあてた。胸の位置に「Y」の文字が編み込まれていた。中学生のあの時には気が付かなかつたユキオの頭文字「Y」。母は覚えたばかりの英文字を入れてくれていたのだ。

翌日。妻は、セーターを着た。

「肩が落ちてるし、わたしには大きいかな？ まあ、いいつか、大きめが今の流行りやし」独り言のように言いながら、私と二人で、入院している母を見舞つた。

「そのセーター、どこで見つけたんや？ ……アヤコさんが着てくれるんやね」

（憶えてたんや……お母ちゃん）

「お母ちゃん、セーター、着んど、ごめんな」

涙声を堪えて、それだけやつと言えた。

「他人さんのもんばつかり編んで、ごめんやつたで。男の子やもんな、あんな派手なセーター恥ずかしてわな。着てくれんでも、編むことができただけで満足やつたんよ」目が潤んでくるのを堪えられなかつた。